序　言

釈尊は一代五十年の説教の中で法華経に説くところを仏教の至極とし、此の経典を、真実にして最第一となされており、その法華経の中に於て、釈尊の入滅後二千年を経過した末法の世に真の仏法である妙法蓮華経を以て一切の衆生を救うべく上行菩薩という方を召出して妙法を付嘱せられておりますが、此の経文からいえば必ず末法唯今の時に上行菩薩が出現しなければならないのでありまして、若し出現しないならば釈尊の経説は虚妄になるのであります。そこで法華経に説かれてあるところの上行菩薩が末法に出現しての御行動を鏡として、その人を尋ねますと日蓮大聖人がその人に当たるのであります。それは大聖人の一代の御行動が寸分を違わず合致しておるからであります。それ故、此の動かすことのできない事実を以って、日蓮大聖人は末法の衆生に対して日蓮は上行菩薩の再誕であると教えられたのであります。大聖人は顕仏未来記の中で、「然る間若し日蓮なくんば仏語は虚妄と成らん」と仰せられております。此れは大聖人が上行菩

薩であらせられ、末法に出現し給うたので釈尊の予証がはじめて真実となったとのことであります。時を隔てること二千有余年に於て、恰も符節を合せた此の事実はただ事でなく、不思議と申すほかはありません。これこそ法華経に説かれる如来の秘密、神通の力でありまして、即ち久遠の仏の寿命の不思議なる力用で、何人も疑う余地のない事実であります。

而して大聖人が上行菩薩の再誕であらせられる以上末法のための大聖人御一人のために説かせられた経説であって、即ち釈尊が末法の衆生に対して大聖人が仏であらせられること、その建立の仏法こそ最正深秘であって此の仏法によってこそ仏道を得ることができると予証遊ばされたのであります。大聖人は法華取要抄の中で法華経は誰人のために説けるや、末法の日蓮のためなりと仰せられておりますが、仰いで信じなければならないことであります。

然らば上行菩薩とは如何なる方であらせられるかといえば、法華経によれば、釈尊が久遠に仏道を成ぜられた時に第一番に弟子となられ、其後法性の淵底、寂光土に住し給いしが、法華経涌出品の時、大地の下より涌出し給い、釈尊の久遠を証せられたのであります。それより神力品嘱累品の時に至って、妙法蓮華経の付嘱を受けられたのであります。ここに此の菩薩の久遠に於ける御姿を拝しますと仏道に於ける本因妙の位に居し給い、衆生に下種をされる体勢をとっておられるのであります。此の本因妙の位に居し給ふことは、久遠無作の三身の如来にあらせられることを御示しなさるのであります。仏の因を行じ、仏の果を成ずる、此れが本因本果でありますが

共に仏であります。（此れには因果俱時、因果不二等種々の法門がありますが此処には略します）

法華経の方便品には諸法の実相を十如是を以って説かれ、之れを天台大師は十界十如一念三千を以って開明されておりますがその教理の至要は仏界が九界（衆生）に具わり、九界が仏界に具わることにあります。法華経の前半迹門に於ては此れを空間的、理性的に具わることを説いておりますが本門に於ては之を時間的、事象的に説かれております。即ち本門に上行菩薩が出現せられたのは久遠を証するとともに、釈尊の因位をお明かし遊ばされたのでありまして、その因位はまた上行菩薩のことであらせられます。大聖人は開目抄に「九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に具はりて真の十界互具百界千如一念三千なるべし。」また「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。竜樹天親知ってしかもいまだひろいいださず、但我が天台智者のみこれをいだけり。」と仰せられて、寿量品は十界互具を説かれたのであることを指摘遊ばされております。即ち釈尊は仏界、上行菩薩は九界でありまして本因、本果を表するのであります。此の上から上行菩薩が久遠の無作三身の如来にましますことを拝すべきであります。

かような次第で、上行菩薩は久遠の本因妙下種益の仏でありますから、その再誕であらせられる日蓮大聖人はとりもなおさず久遠本因妙下種の仏であらせられることは申すまでもないことであります。大聖人は「されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり。無作の三身の宝号を南無

妙法蓮華経というなり。寿量品の事の三大事とは是れなり。」と仰せられております。

此処に注意すべきは日蓮大聖人は上行菩薩の再誕であらせられるといって、大聖人よりも上行菩薩を拝する人がありますが、末法の御化導のために出現遊ばされた方は大聖人であります。上行菩薩は大聖人の過去世の御振舞であります。それ故大聖人の尊貴を領解し奉れば最早上行菩薩を考えることはいらないのであります。

大聖人は以上の如き内観の御内証の上に御一代の御行動を展開遊ばされておりますから、その御奉蹟を拝するには是非共此のことを心に於て拝することが肝要と思います。また之れを逆にいって御奉蹟を拝さなければ大聖人の教義は領解できないし、従って法華経も解らなしというべきであります。

今回本宗の柿沼広澄師が大聖人の御伝記を書き下ろされて上梓することになりましたので、私にその序文をと所望されたが著者の意中を察するに大聖人の教義を了解するには必ず御伝記を知らなければならないというので此の挙に出たものと思います。之れは常に布教に精進されておる著者の尊い体験からであると思いますが全く同感であります。但御伝記を読まれるには大聖人の御内証を心において拝すべきで、また御伝記を読むことは御内証を拝す第一歩であると思います。そこでいささか不似合ではないかと思われるようなことでありますが以上を記して序言と致す次第であります。

昭和二十九年
御大会之月

東京都墨田河畔常泉寺に於て

堀米日淳

識